における血栓形成の程度の差を示唆するものと考えられた.

以上, ^{67}Ga-Fib は血栓の検出に有効であり, 十分臨床応用が可能な製剤と考えられた.

なお, 本研究は厚生省核医学診断薬剤開発研究班の研究の一環として行われた.

12. ST-439 および ST-433 モノクローナル抗体による腫瘍イメージングの基礎的検討

中村佳代子　塚谷　泰司　久保　敦司
橋本　省三　(慶応大・放)
大石　崇　渡辺　昌彦　小平　進
(同・外)

ST-439 および ST-433 はいずれもヒト胃癌 (ST-4) と反応するモノクローナル抗体 (IgM) で, ST-439 はすでに消化器系癌の血清診断に用いられている. これらの抗体を ^{125}I にて標識し, 大腸癌 (Co-4), 胃癌 (H-111) を植えたヌードマウスに投与し, 生体内での動態を検討した. ST-439 (ポリマー) は静注後, 速やかに腫瘍に集積はしたが, 血中の放射活性が高く, 4日目に腫瘍への局在が確認された. ST-439 (モノマー) では静注後3日目に明確な画像が得られたが, 腫瘍に集積した放射活性は ST-439 (ポリマー) の場合よりも低下していた. これに対して, ST-433 では, 静注3日後に腫瘍 (H-111) の鮮明な画像が得られ, 他の正常組織への分布もきわめて低かった. 非特異的 IgM では腫瘍への集積は認められず, また, 腫瘍の大きさに比例して ST-433 の集積が増加したことなどから, ST-433 が腫瘍の抗原と反応して特異的に取り込まれることが示唆された.

13. ^{131}I 治療を施行した甲状腺分化癌の骨転移症例の検討

福島佳奈子　唐沢久美子　兼安　祐子
太田　淑子　広江　道昭　牧　正子
日下部きよ子　(東女医大・放)

1974年3月から1986年6月の12年間に甲状腺分化癌の転移に対し, I-131 治療を行った60例のうち, 単純X線写真上骨転移の確認されている21例について, 初回 I-131 治療後の経過を中心に検討を行った.

21例の内訳は, 男性5人, 女性16人で男女比は1対3である. 原発巣の病理組織診断は乳頭癌1例に対し, 濾胞癌が19例と圧倒的に濾胞癌が多い. I-131 治療回数は1～5回 (平均2.6回) で, 総量は100～600 mCi (平均290 mCi) である.

5年生存率は12例中2例で16.7%であり, 10年生存率は5例中0で0%である. 甲状腺癌にて死亡した症例は21例中11例 (52.4%) で, 初回 I-131 治療から平均3.5年である. 骨転移のみの12例と肺転移の合併群6例との間に, 甲状腺癌摘出術時の年齢, I-131 初回治療時の年齢, 死亡率において差はみられなかったが, I-131 初回治療から死亡までの期間には差がみられた.

14. 骨シンチにて集積を認めた巨大子宮筋腫の一症例

井上　裕美　福島　安義
(茅ケ崎徳洲会病院・産婦)
相澤　信行　明石　恒浩　清水　俊夫
(同・内)
鈴木　豊　(東海大・放)

Bone scan は, 骨疾患に対し, 現在最も活用されている核医学 imaging の1つであるが, 骨外集積に関する報告も少なくない. しかし産婦人科領域での使用は未だに数少ない. 今回われわれは, hyaline and cystic degeneration を伴った巨大な子宮筋腫に ^{99m}Tc-MDP の集積を描出した症例を経験したので報告する. 症例は43歳女性. 両下肢のむくみと腹部膨満感にて来院, 精査のため入院となる. 内診所見にて子宮とは別に骨盤腔から腹腔全体を占める巨大な mass を認めた. 血圧, 脈, 体温は正常, また尿, 血液検査もすべて正常であった. 腹部単純レントゲン写真で石灰化は認められなかった. ^{99m}TC-MDP 20 mCi による全身骨 scan にて腹部の異常集積を認めた. 開腹所見後の結果は hyaline and cystic degeneration を伴った巨大な漿膜下子宮筋腫であった. カルシウム染色は陰性. われわれの知る限り, 石灰化を伴わない子宮筋腫への ^{99m}Tc-MDP の集積の報告はない. その機序については明らかではない.

Presented by Medical*Online